

見尊ノ兄火闌降命ノ苗裔ナリト稱ス、景行天皇十二年熊襲始テ反シテ邊境ヲ侵ス、天皇親征シテ之ヲ平ゲ給フ、尋デ二十七年熊襲再ビ反ス、皇子日本武尊ヲ遣シテ之ヲ征セシム、仲哀天皇二年熊襲復タ反ス、天皇親征シ、事竟ヘズシテ崩御シ給ヒシカバ、九年皇后息長足姬尊、神教ヲ奉ジ、吉備臣ノ祖鴨別ヲ遣ハシテ、擊テ熊襲ヲ平グシム、爾來復タ反亂ノ事無ク、子孫相承ケテ、朝廷ニ奉仕シ、畿内及ビ近江、丹波、紀伊等ノ諸國ニ移住セシモノ頗ル多シ、隼人ノ事ハ、尙ホ官位部隼人司篇ニ詳ナルヲ以テ、此篇ニハ省略セルモノ多シ、又隼人舞ノ事ハ、樂舞部舞篇ニ載セタリ、

〔古事記〕<sup>上</sup>於<sup>上</sup>是二柱神伊邪那神、伊邪美神、中略、伊次生筑紫島、此島亦身一而有面四、每面有名、中略、熊曾國謂建日別

〔古事記傳〕<sup>五</sup>熊曾國は曾國なり、曾と云は、もと書紀神代卷に、日向襲とある地にして、和名抄に大隅國噲唵郡ある是なり、略、國名となりてありしことは、書紀景行卷に、十二年十二月、議討熊襲於是天皇詔群卿曰、朕聞之、襲國有厚鹿、鹿文者、是兩人熊襲之渠帥者也、衆類甚多、是謂熊襲八十梟帥、其鋒不可當焉云々、又十三年五月、悉平襲國などあり、是を以て襲國即熊曾なることをも知べし、略、彼梟帥どものいと建タケかりし故に、熊曾とは云なり、熊、熊鷹、熊鷹なども、皆猛きを云稱なり、略、さて曾と云名義は、古語拾遺に、天鈿女命、古語天乃於須女、其神强悍猛固、故以爲名、今俗強女謂之於須志、此緣也、と見え、源氏物語帚木卷に、かくおぞましくは、いみじき契深くとも、絶て又見じと見え、俗語にもおぞきおそろしきなど云、されば曾は此於曾の約りたるにて、是も猛き意なるべし、書紀に襲と云字をしも用ひられたるも、本言於曾なる故なるべし、略、又思ふに、曾は勇男ユウヲのつゝまりたるか、佐乎サヲをつゝむれば曾にて、伊を略くは常なり、書紀に渠帥をもイサヲと訓り、又功をも伊曾と云を思ふべし、略、さて筑紫島を四として、